

西村稔先生（1947～2019）年譜・著作目録（第8稿）

（2023（令和5）年11月現在）

阪本尚文編

- ・本年譜・著作目録は、阪本尚文編『Aún aprendo それでもまだ学ぶぞ——西村稔先生追悼集』（私家版、2020（令和2）年2月28日刊）¹に収録した「西村稔先生年譜・著作目録」に拠りつつ、若干の修正を加えたものである（HP初出：2020（令和2）年4月4日）。
- ・2020（令和2）年5月28日第2稿作成（二（二）翻訳書（単独訳）、（三）著書（共著）、（四）翻訳書（共訳）につき、書評6点の書誌情報を追加した）。
- ・2020（令和2）年11月18日第3稿作成（二（一）著作（単著）、（二）翻訳書（単独訳）につき、書評計5点の書誌情報を追加した）。
- ・2021（令和3）年7月31日第4稿作成（註1を加筆した）。
- ・2021（令和3）年11月3日第5稿作成（二（一）著作（単著）につき、書評1点の書誌情報を追加した）。
- ・2022（令和4）年4月1日第6稿作成（二（三）著作（共著）につき、書評1点の書誌情報を追加した）。
- ・2022（令和4）年5月18日第7稿作成（註1を加筆した）。
- ・2023（令和5）年11月4日第8稿作成（註1を加筆し、二（五）に、★付記を1点追加した）。

〔目次〕

一 西村稔先生年譜.....	2
二 西村稔先生著作目録（2023（令和5）年11月現在）	3
（一）著書（単著）	3
（二）翻訳書（単独訳）	4
（三）著書（共著）	5
（四）翻訳書（共訳）	6

¹ 福島大学学術機関情報リポジトリ所収 <<http://hdl.handle.net/10270/5154>>。本追悼集所収の編者による追悼文（阪本尚文「西村稔先生の教養思想をめぐる覚え書」（5-9頁））の続篇として、同「学部の争い——西村稔先生の教養思想をめぐる覚え書拾遺」（『近代警察史の諸問題——川路大警視研究を中心に（警察政策学会資料第115号）』（第二輯・下冊）、2021（令和3）年5月8日）、451-454頁 <<http://hdl.handle.net/10270/5431>>がある（2021（令和3）年7月31日一部修正）。この二つの小品に加えて、同「額縁と絵のあいだ——上山安敏先生と西村稔先生」（『CD版上山安敏先生略年譜・著作目録（5訂版）——上山安敏先生追悼』、2022（令和4）年2月1日）、268-270頁 <<http://hdl.handle.net/10270/5598>> および最新版の年譜・著作目録をまとめた、同編「西村稔先生年譜・著作目録——西村稔先生の人と学問」（『CD版宮崎道三郎博士・小林宏先生・西村稔先生・高橋由利子先生略年譜・著作目録』、2022年4月1日）、1-32頁 <<http://hdl.handle.net/10270/5662>>を作成した。「額縁と絵のあいだ——上山安敏先生と西村稔先生」は、「上山安敏先生と西村稔先生」と改題のうえで、『上山安敏先生追悼文集』 <<http://hdl.handle.net/2433/285555>>、2023（令和5）年10月28日に再録していただいた（一部加筆・修正を加えている）（2023（令和5）年11月4日一文追加）。また、ほかに波多野敏氏による追悼文として、「西村稔先生のこと」『法制史研究』第71号、2022年3月、425-427頁が公表されている（2022（令和4）年5月18日一部修正）。

(五) 学術論文 (単著)	7
(六) 学術論文 (共著)	10
(七) 翻訳	11
(八) 書評・紹介	11
(九) 事典執筆項目	12
(一〇) その他	12
(一一) 学会報告	13
(一二) 外部資金獲得実績	14
(一三) 審議会など	14

一 西村稔先生年譜

- 1947 (昭和 22) 年 11 月 4 日 滋賀県に生まれる。
- 1963 (昭和 38) 年 4 月 大阪府立北野高等学校入学。
- 1966 (昭和 41) 年 3 月 大阪府立北野高等学校卒業。
- 1966 (昭和 41) 年 4 月 京都大学法学部入学。
- 1971 (昭和 46) 年 3 月 京都大学法学部卒業。
- 1971 (昭和 46) 年 4 月 朝日新聞社入社。
- 1972 (昭和 47) 年 3 月 朝日新聞社退職。
- 1972 (昭和 47) 年 4 月 大阪大学文学部聴講生。
- 1973 (昭和 48) 年 4 月 京都大学大学院法学研究科修士課程入学。
- 1975 (昭和 50) 年 3 月 京都大学大学院法学研究科修士課程修了。
- 1975 (昭和 50) 年 4 月 京都大学大学院法学研究科博士課程進学。
- 1976 (昭和 51) 年 3 月 京都大学大学院法学研究科博士課程退学。
- 1976 (昭和 51) 年 4 月 京都大学法学部助手。
- 1979 (昭和 54) 年 4 月 岡山大学法文学部法学科専任講師。
- 1980 (昭和 55) 年 4 月 岡山大学法学部助教授。
- 1988 (昭和 63) 年 4 月 岡山大学法学部教授。
- 1989 (平成元) 年 4 月 法学博士 (京都大学)。
- 1998 (平成 10) 年 4 月 岡山大学評議員 (2000 年 3 月まで)。
- 2004 (平成 16) 年 3 月 岡山大学法学部退職。岡山大学名誉教授。
- 2004 (平成 16) 年 4 月 京都大学大学院人間・環境学研究科教授。
- 2012 (平成 24) 年 3 月 京都大学大学院人間・環境学研究科退職。京都大学名誉教授。
- 2019 (令和元) 年 10 月 28 日 逝去。

二 西村稔先生著作目録（2023（令和5）年11月現在）

（一）著書（単著）（*：書評、★：注記）

1987（昭和62）年

『知の社会史—近代ドイツの法学と知識社会』、木鐸社、1987年10月30日。

* 上山安敏「1987年読書アンケート」『みすず』第30巻第1号、1988年1月、59頁。

* 三島憲一「今でもわれわれを縛っているドイツ—西村稔著『知の社会史』」『朝日ジャーナル』1988年1月22日号、63-64頁。

* 筒井清忠「書評 西村稔著『知の社会史—近代ドイツの法学と知識社会』」『週刊読書人』第1719号、1988年2月、4面。

* 上山安敏「書評 法学界の閉ざされた扉を開く異色の書 西村稔著『知の社会史—近代ドイツの法学と知識社会』」『週刊ポスト』第20巻第30号、1988年7月、116-117頁。

* 前谷和則「書評 西村稔著『知の社会史—近代ドイツの法学と知識社会』」『歴史学研究』第590号、1989年2月、55-58頁。

* 海老原明夫「書評 西村稔著『知の社会史—近代ドイツの法学と知識社会』」『法制史研究』第38号、1989年3月、320-326頁。

* 望田幸男『ドイツ史学徒が歩んだ戦後と史学史的追想』、本の泉社、2020年1月12日、100頁（2020（令和2）年11月18日追加）。

* 関廣野「書評 西村稔著『知の社会史—近代ドイツの法学と知識社会』 学問内在の政治つくモダンなるものにひそむ陥穽」『This is』第50号、1988年4月、322-323頁（2021（令和3）年11月3日追加）。

1998（平成10）年

『文士と官僚—ドイツ教養官僚の淵源』、木鐸社、1998年2月25日。

* 立花隆「私の東大論Ⅲ—東大法学部は『湯呑み』を量産している」『文藝春秋』第76巻第5号、1998年5月、188頁（同『東大生はバカになったか—知的亡国論+現代教養論』、文藝春秋、2001年10月30日、133-135頁）。

* 佐野誠「書評 西村稔著『文士と官僚—ドイツ教養官僚の淵源』」『週刊読書人』第2240号、1998年6月、8面。

* 坂昌樹「啓蒙の『学識』と『公・私』のヤヌス—西村稔著『文士と官僚—ドイツ教養官僚の淵源』、木鐸社、1998年を中心にして、別府昭郎著『ドイツにおける大学教授の誕生』、創文社、1998年および松元忠士著『ドイツにおける学問の自由と大学自治』、敬文堂、1998年にもふれつつ」『国際文化論集』第18号、1998年9月、69-89頁。

* 上山安敏「1998年読書アンケート」『みすず』第41巻第1号、1999年1月、46頁。

* 望田幸男「書評 西村稔著『文士と官僚—ドイツ教養官僚の淵源』」『歴史学研究』第723号、1999年5月、44-47頁。

* 田村栄子「書評 西村稔著『文士と官僚—ドイツ教養官僚の淵源』」『学鑑』第96巻

第5号、1999年5月、40-43頁。

*望田幸男『ドイツ史学徒が歩んだ戦後と史学史的追想』、本の泉社、2020年1月12日、100頁（2020（令和2）年11月18日追加）。

★1999年度東京大学後期入学試験（文科論文Ⅱ）で出題。

2006（平成18）年

『福澤諭吉——国家理性と文明の道徳』、名古屋大学出版会、2006年12月15日。

*竹内洋「ブックレビュー 竹内洋の読書日記（第4回）福澤諭吉の『交際の教養』に納得——日本人の輪郭を取り戻すには」『週刊東洋経済』第6060号、2007年1月、117頁（同「読書日記7」（同『学問の下流化』、中央公論新社、2008年10月10日）、250頁）。

*上山安敏「2006年読書アンケート」『みすず』第49巻第1号、2007年2月、91頁。

*佐藤卓己「福澤思想のダイナミズムを見事に交通整理——西村稔著『福澤諭吉——国家理性と文明の道徳』」『中央公論』第122巻第3号、2007年3月、270頁（同「方法的二元論を駆使した啓蒙のレトリック」（『現代史のリテラシー——書物の宇宙』、岩波書店、2012年1月14日）、149-150頁）。

*河野有理「学界展望＜アジア政治思想史＞ 西村稔著『福澤諭吉——国家理性と文明の道徳』」『国家学会雑誌』第120巻第7・8号、2007年8月、589-592頁；同「福澤諭吉における＜社交＞の精神と＜教養＞の秩序——西村稔著『福澤諭吉——国家理性と文明の道徳』を読む」『福澤諭吉年鑑』第34巻、2007年8月、34-54頁。

*嘉戸一将「書評 西村稔著『福澤諭吉——国家理性と文明の道徳』」『人環フォーラム』第22号、2008年3月、60頁。

*安西敏三「書評 西村稔著『福澤諭吉——国家理性と文明の道徳』」『法制史研究』第57号、2008年3月、267-271頁。

2019（令和元）年

『丸山眞男の教養思想——学問と政治のはざままで』、名古屋大学出版会、2019年7月10日。

*都築勉「書評 西村稔著『丸山眞男の教養思想——学問と政治のはざままで』」『図書新聞』第3418号、2019年10月、3面。

*山辺春彦「書評 西村稔著『丸山眞男の教養思想——学問と政治のはざままで』」『週刊読書人』第3317号、2019年11月、3面。

*上山安敏「2019年読書アンケート」『みすず』第62巻第1号、2020年2月、91頁。

*荻部直「丸山眞男研究の新たな動向」『アステイオン』第92号、2020年5月、180-183頁（2020（令和2）年11月18日追加）。

*望田幸男「『私の戦後』再考——書評・感想との「『通信対話』」『季論21』第50号、2020年10月、36-37頁（2020（令和2）年11月18日追加）。

（二）翻訳書（単独訳）

1985（昭和60）年

ウォルター・Z・ラカー『ドイツ青年運動—ワンダーフォーゲルからナチズムへ』、人文書院、1985年6月25日。

1991（平成3）年

フリッツ・K・リンガー『読書人の没落—世紀末から第三帝国までのドイツ知識人』、名古屋大学出版会、1991年5月10日。

*猪木武徳「書評 フリッツ・K・リンガー著『読書人の没落—世紀末から第三帝国までのドイツ知識人』、西村稔訳『外交フォーラム』第4第7号、1991年7月、97頁（2020（令和2）年5月27日追加）。

*杉山光信「書評 フリッツ・K・リンガー著『読書人の没落—世紀末から第三帝国までのドイツ知識人』、西村稔訳『思想』第811号、1992年1月、68-72頁。

*上山安敏「1991年読書アンケート」『みすず』第34巻第1号、1992年1月、41頁。

*倉橋重史「書評 フリッツ・K・リンガー著『読書人の没落—世紀末から第三帝国までのドイツ知識人』、西村稔訳『大学論集』第22号、1993年3月、289-291頁。

*筒井清忠「現代の古典 知識人の変遷—F・K・リンガー著『読書人の没落』」『季刊アステイオン』第29号、1993年7月、179-183頁（2020（令和2）年5月27日追加）。

*早島瑛「書評 フリッツ・K・リンガー著『読書人の没落—世紀末から第三帝国までのドイツ知識人』、西村稔訳『社会経済史学』第60巻第6号、1995年3月、857-859頁。

*望田幸男『ドイツ史学徒が歩んだ戦後と史学史的追想』、本の泉社、2020年1月12日、99-101頁（2020（令和2）年11月18日追加）。

1995（平成7）年

マーガレット・A・マレー『魔女の神』、人文書院、1995年8月30日。

*長尾龍一「書評 マーガレット・A・マレー著『魔女の神』、西村稔訳『朝日新聞』1995年10月1日付朝刊、第13面。

*上山安敏「1995年読書アンケート」『みすず』第38巻第1号、1996年1月、40頁。

（三）著書（共著）

1982（昭和57）年

「エールリッヒの団体説—特にギールケと比較して」（岡山大学法学会編『岡山大学創立30周年記念論文集 法学と政治学の現代的展開』、有斐閣、1982年2月15日）399-434頁。

*河上倫逸「書評 西村稔著「エールリッヒの団体説—特にギールケと比較して」（「法学と政治学の現代的展開 岡山大学創立30周年記念論文集）」『法制史研究』第33号、1984年3月、339-342頁。

1983（昭和58）年

「啓蒙期法思想と知識社会—カントと啓蒙官僚」（長尾龍一／田中成明編『現代法哲学2—法思想』、東京大学出版会、1983年11月1日）、163-206頁。

1984（昭和 59）年

「ギールケ「ドイツ団体法」について」（飯田経夫他監修『今日から生かせるビジネスマンのためのザ・カルチュアバンク——人類の知的遺産・354 の古典情報』、PHP 研究所、1984 年 3 月 25 日）、121 頁。

1987（昭和 62）年

「ドイツ官僚法学の形成と国家試験」（上山安敏編『近代ヨーロッパ法社会史』、ミネルヴァ書房、1987 年 4 月 25 日）、240-263 頁。

「ドイツ第二帝政期の公法学」（上山安敏編『近代ヨーロッパ法社会史』、ミネルヴァ書房、1987 年 4 月 25 日）、264-283 頁。

*成瀬治「書評 上山安敏編著『近代ヨーロッパ法社会史』」『法制史研究』第 38 号、1989 年 3 月、316-320 頁（2020（令和 2）年 5 月 27 日追加）。

「第二帝政期における法学者の政治意識」（河上倫逸編『上山安敏教授還暦記念論集 ドイツ近代の意識と社会——法学的・文学的ゲルマニスティクのアンビヴァレンツ』、ミネルヴァ書房、1987 年 4 月 10 日）、288-315 頁。

1998（平成 10）年

「レトリックの遺産としての社交術」（植松秀雄編『埋もれていた術・レトリック』、木鐸社、1998 年 12 月 1 日）、175-205 頁。

*葛西康徳「書評 植松秀雄編著『レトリック研究会叢書 5——埋もれていた術・レトリック』」『法制史研究』第 49 号、2000 年 3 月、278 頁（2022（令和 4）年 4 月 1 日追加）。

2001（平成 13）年

「現代日本の『教養』観念」（岡山大学法学会編『岡山大学創立 50 周年記念論文集 世紀転換期の法と政治』、有斐閣、2001 年 11 月 10 日）、345-431 頁。

2003（平成 15）年

「比較文化論と思想史の『方法』について」（上山安敏編『法観念の比較文化論』、国際高等研究所、2003 年 6 月 16 日）、161-173 頁。

2009（平成 21）年

「福澤諭吉と現代」（慶應義塾他編『慶應義塾創立 150 年記念 未来をひらく福澤諭吉展』、慶應義塾、2009 年 1 月 10 日）、10-17 頁。

（四）翻訳書（共訳）

1979（昭和 54）年

『ウェーバーの大学論』、上山安敏／三好敏博／西村稔編訳、木鐸社、1979 年 10 月 30 日。

*折原浩「書評 『ウェーバーの大学論』、上山安敏／三吉敏博／西村稔編訳——日本の大学論にとって必要・有意義な反省の素材」『朝日ジャーナル』第 22 巻第 13 号、1980 年 3 月、69-70 頁（2020（令和 2）年 5 月 27 日追加）。

*荒川重勝「書評 『ウェーバーの大学論』、上山安敏／三吉敏博／西村稔編訳」『法律

時報』第 52 卷第 6 号、1980 年 6 月、120-124 頁。

*横尾壮英「書評『ウェーバーの大学論』、上山安敏／三吉敏博／西村稔編訳——理論と実践との見事な斉合性」『大学史研究』第 3 号、1983 年 7 月、78-84 頁（2020（令和 2）年 5 月 27 日追加）。

1980（昭和 55）年

H・ヘラー「法治国家か独裁か」、西村稔／宮本盛太郎訳、G・ライプホルツ「ドイツにおける自由・民主主義の崩壊と権威主義的国家像」、西村稔／初宿正典／宮本盛太郎訳（H・ヘラー他『ヴァイマル民主主義の崩壊』、宮本盛太郎他訳、木鐸社、1980 年 2 月 10 日）、5-34、115-225 頁。

*黒川康「新刊紹介 ヘルマン・ヘラー他著『ヴァイマル民主主義の崩壊』、宮本盛太郎他訳」『史学雑誌』第 89 卷第 8 号、1980 年 8 月、1317-1318 頁。

*中道寿一「小林昭三著『ワイマール共和制の成立』ヘルマン・ヘラー他著『ヴァイマル民主主義の崩壊』——深刻な危機の分析を通じて近來の政治動向をも照射」『朝日ジャーナル』第 22 卷第 42 号、1980 年 10 月、72-74 頁（2020（令和 2）年 5 月 27 日追加）。

*中道寿一「書評 ヘルマン・ヘラー他著『ヴァイマル民主主義の崩壊』、宮本盛太郎他訳」『岐阜経済大学論集』第 17 卷第 1 号、1983 年 3 月、203-214 頁。

1984（昭和 59）年

グスタフ・シュミット「エルンスト・トレルチ」（ハンス＝ウルリヒ・ヴェーラー編『ドイツの歴史家 4』、ドイツ現代史研究会訳、未來社、1984 年 7 月 20 日）、59-90 頁。

2019（令和元）年

フンボルト『国家活動の限界』、西村稔編訳、京都大学学術出版会、2019 年 8 月 10 日。

（五）学術論文（単著）

1976（昭和 51）年～1977（昭和 52）年

「合法的思考の歴史的成立——歴史法学の価値理念と自由主義」（1）-（4）・完、『法学論叢』第 99 卷第 5 号-第 102 卷第 2 号、1976 年 8 月-1977 年 11 月。

（1）第 99 卷第 5 号、1976 年 8 月、18-53 頁

（2）第 100 卷第 3 号、1976 年 12 月、67-99 頁

（3）第 101 卷第 5 号、1977 年 8 月、31-63 頁

（4）・完 第 102 卷第 2 号、1977 年 11 月、29-54 頁

1979（昭和 54）年

「ドイツ法社会学成立論序説——エールリッヒを中心として」『法制史研究』第 28 号、1979 年 3 月、35-69 頁。

*六本佳平「書評 西村稔著「ドイツ法社会学成立論序説——エールリッヒを中心として」（法制史研究第 28 号）」『法制史研究』第 30 号、1981 年 3 月、438-440 頁。

1981（昭和 56）年～1984（昭和 59）年

「近代ドイツにおける法学と知識社会——オットー・フォン・ギールケを中心として」

(1) - (8) ・完、『岡山大学法学会雑誌』第31巻第2号-第34巻第1号、1981年11月-1984年9月。

- (1) 第31巻第2号、1981年11月、1-50頁
- (2) 第31巻第3号、1982年1月、1-82頁
- (3) 第31巻第4号、1982年3月、81-122頁
- (4) 第32巻第1号、1982年7月、85-192頁
- (5) 第32巻第2号、1982年11月、25-120頁
- (6) 第33巻第3号、1984年2月、63-121頁
- (7) 第33巻第4号、1984年3月、123-173頁
- (8) ・完 第34巻第1号、1984年9月、31-143頁

1985（昭和60）年

「ウェーバーと法律学」（1）、『岡山大学法学会雑誌』第35巻第1号、1985年9月、73-108頁。

1991（平成3）年～1992（平成4）年

「一八世紀の文芸と法——学識観念の変化を中心として」（1）-（5）・完、『岡山大学法学会雑誌』第40巻第3・4号-第41巻第4号、1991年3月-1992年3月。

- (1) 第40巻第3・4号、1991年3月、259-308頁
- (2) 第41巻第1号、1991年7月、95-165頁
- (3) 第41巻第2号、1991年10月、61-164頁
- (4) 第41巻第3号、1992年2月、115-159頁
- (5・完) 第41巻第4号、1992年3月、1-120頁

1994（平成6）年

「マックス・ウェーバーと『教養』」（1）-（2・完）、『岡山大学法学会雑誌』第44巻第1号-第44巻第2号、1994年9月-1994年12月。

- (1) 第44巻第1号、1994年9月、43-74頁
- (2・完) 第44巻第2号、1994年12月、1-45頁

1995（平成7）年

「ウェーバーと『リテラテン』——『ゲレールテン』と対比して」『岡山大学法学会雑誌』第44巻第3・4号、1995年3月、255-322頁。

「カントにおける『クルークハイト』について」『岡山大学法学会雑誌』第45巻第1号、1995年12月、287-337頁。

★付記 田中成明『カントにおける法と道徳と政治——カント「法」哲学読解試論ノート』（有斐閣、2023年6月）には、同論文につき、「カントの実践哲学や法律学・裁判実務の見方の以上のような問題性については[...]、畏友西村稔元岡山大学・京都大学教授の著作や談義を通じて示唆を得たところが多い。とくに西村（1995）、同（1995）^{〔参考文献〕}参照。」とある（21-22頁）。同書では西村先生の作品がしばしば言及されており（人名索引にある、21-22、182頁のほか、231、233、248-249、251、261頁）、あとがきにも、「カント法哲学に若い頃はあまり魅力を感じなかったのは、その当時の『法論』についての一般的評価の影響もあるが、学部学生時代に上山安敏先生の

『西洋法制史』の授業で、カントが活躍した当時のプロイセンの絶対主義的君主制下の官僚制・大学学問・学識層に対する社会史的観点からの鋭い批判に接していたことや、法哲学の研究を始めた後も法律学的方法論の研究において、カントらの正統派近代哲学では無視ないし軽視されてきたレトリック（弁論術）の伝統の現代的復権をめざす潮流に関心をもっていただいていたことのほうが大きかったと思う。関連個所で触れたように、それぞれから強い影響を受けた二人の畏友、西村稔教授と植松秀雄教授との談論や著作を通じてカントの学問観・政治的姿勢についての批判的な見方を教えられ貴重な示唆を得ることができたが、それでも、彼らのカント批判に基本的に賛同しつつも、カントの実践哲学に関する著作を全体としてみれば、彼らの批判を上回る独特の貴重な洞察があちこちにちりばめられているのではないかと、漠然と考えていたことは確かであり、ある時期から、いつかは私なりに納得のゆくカント『法』哲学の読解試論をまとめることができればと密かに考えるようになった。私なりのカント『法』哲学の全体像の輪郭がみえはじめた頃は、まだ三島先生、上山先生、西村教授がご存命で、私がカントを読み直していることを話すと、『どういう心境の変化なのか、お手並み拝見』と、あまり期待されていなかったようで、私のカント『法』哲学像にどのような反応をされるかを愉しみに仕事を進めてきたが、私がモタモタしているうちに幽明境を異にすることになり、これらの方々からこの多少居直りの挑戦的な拙著に対する評価をうかがうことができなくなってしまったのは返す返すも残念である。」（326-327 頁）とある（2023（令和5）年11月4日追加）。

1997（平成9）年

「カントとレトリック」『岡山大学法学会雑誌』第46巻第3・4号、1997年3月、133-203頁。

2000（平成12）年

「教養と作法——覚え書」（1）、『岡山大学法学会雑誌』第49巻第3・4号、2000年3月、41-113頁。

「司法改革ウォッチング 岡山大学法学部の法科大学院構想——『地方における法学教育研究会』に寄せて」『司法改革』第1巻第12号、2000年9月、12-15頁。

2001（平成13）年

「川島法社会学と『武士』の道徳」『奈良法学会雑誌』第13巻第3・4号（上山安敏教授 中野貞一郎教授退任記念号）、2001年3月、1-44頁。

★付記「本稿を書くにあたって、[川島武宜——編者]『所有権法の理論』を一部読み返したが、目次の下に「7・4」、「7・8」、「7・11 10:00AM・楽友」という書き込みがあるのに気づいた。昭和四四年にある事情で演習を楽友会館で行うことを余儀なくされた際の情景がありありと甦ってきた。このささやかな思い出とともに、今後も先生の驥尾に付していく覚悟をもって、お礼にかえさせていただきたい。」

「作法の欠落——教養主義と現代」『大航海』第38号、2001年4月、171-179頁。

2002（平成14）年～2003（平成15）年

「福澤諭吉と武士の伝統——教養と作法を中心として」（1）-（7・完）、『岡山大学法

学会雑誌』第51巻第1号-第52巻第4号、2002年1月-2003年3月。

- (1) 第51巻第1号、2002年1月、1-82頁
- (2) 第51巻第2号、2002年2月、45-90頁
- (3) 第51巻第3号、2002年3月、1-49頁
- (4) 第51巻第4号、2002年3月、1-76頁
- (5) 第52巻第2号、2003年3月、11-61頁
- (6) 第52巻第3号、2003年3月、151-186頁
- (7・完) 第52巻第4号、2003年3月、105-168頁

2004（平成16）年

「福澤諭吉と『国家理性』——丸山眞男の『思惟方法』論を手がかりにして」『福澤諭吉年鑑』第31号、2004年12月、3-34頁。

2004（平成16）年～2008（平成20）年

「『欧化』と道徳——新渡戸稲造の道徳・礼儀論」（1）-（5・完）、『岡山大学法学会雑誌』第53巻第3・4号-第57巻第3号、2004年3月-2008年3月。

- (1) 第53巻第3・4号、2004年3月、1-37頁
- (2) 第54巻第3号、2005年3月、79-125頁
- (3) 第56巻第3・4号、2007年3月、333-377頁
- (4) 第57巻2号、2007年12月、79-119頁
- (5・完) 第57巻3号、2008年3月、1-39頁

2006（平成18）年

「社会を斬る——一身独立して一国独立す」『人環フォーラム』第18号、2006年3月、52-55頁。

2014（平成26）年～2016（平成28）年

「知識人と『教養』——丸山眞男の教養思想」（1）-（6・完）、『岡山大学法学会雑誌』第64巻第1号-第66巻第2号、2014年9月-2016年12月。

- (1) 第64巻第1号、2014年9月、103-194頁
- (2) 第64巻第2号、2014年12月、17-65頁
- (3) 第65巻第1号、2015年8月、61-129頁
- (4) 第65巻第2号、2015年12月、89-175頁
- (5) 第66巻第1号、2016年8月、1-88頁
- (6・完) 第66巻第2号、2016年12月、93-166頁

(六) 学術論文（共著）

2000（平成12）年

岡山大学法学部ロースクール設置準備室ワーキンググループ代表（西村稔／中村誠／服部高宏）「ロースクール構想と地方大学法学部・法学系大学院の役割」『岡山大学法学会雑誌』第49巻第2号、2000年1月、97-108頁。

2001（平成13）年

宮本盛太郎／西村稔「森鷗外とルードルフ・フォン・イエーリング」『書齋の窓』第501号、2001年1月、37-41頁。

(七) 翻訳

1975（昭和50）年

「マックス・ヴェーバーの大学論」（1）-（3）、上山安敏／三吉敏博／西村稔訳、『法学論叢』第97巻第2号-1975年-第98巻第2号、1975年5月-11月。

(1) 第97巻第2号、1975年5月、87-94頁

(2) 第97巻第4号、1975年7月、96-104頁

(3) 第98巻第2号、1975年11月、101-106頁（（3）のみ副題：「ドイツの大学における所謂『教授の自由』」）

1981（昭和56）年

オイゲン・エールリッヒ「私法における社会問題」、西村稔訳、『岡山大学法学会雑誌』第30巻第3号、1981年1月、67-90頁。

(八) 書評・紹介

1980（昭和55）年

「書評 H・ミッタイス著『法史学の存在価値』」『日本読書新聞』第2058号、1980年5月、第6面。

「書評 笹倉秀夫著『近代ドイツの国家と法学』」『法哲学年報1979』、1980年10月、242-252頁。

1982（昭和57）年

「書評 長尾龍一他編著『新ケルゼン研究』」『日本読書新聞』第2141号、1982年1月、第6面。

1987（昭和62）年

「書評 上山安敏著『世紀末ドイツの若者』」『正論』第177号、1987年5月、206-207頁。

「書評 宮崎良夫著『法治国理念と官僚制』」『社会科学研究』第39巻第2号、1987年9月、181-190頁。

1989（平成元）年

「書評 佐野誠著「カリスマ法制化への道程—マックス・ウェーバーにおけるカリスマ的支配の創造と発展」（1）-（2）・完（『法学論叢』第118巻第2号、第119巻第5号）「マックス・ウェーバーの普遍史的思考における『法と支配』の位置—W・J・モムゼンのウェーバー論再考」（『法学論叢』第121巻第5号）」『法制史研究』第38巻、1989年3月、393-395頁。

1990（平成2）年

「書評 望田幸男／田村栄子著『ハーケンクロイツに生きる若きエリートたち』」『書齋

の窓』第 393 号、1990 年 4 月、52-54 頁。

1993 (平成 5) 年

「紹介 ジェイムズ・Q・ホイットマン著『ドイツ・ロマン主義時代のローマ法の遺産——歴史的な光景と法的変動』1990 年」(1) - (2)・完、『岡山大学法学会雑誌』第 42 巻 3・4 号-第 43 巻第 1 号、1993 年 3 月-9 月。

(1) 第 42 巻第 3・4 号、1993 年 3 月、73-117 頁

(2・完) 第 43 巻第 1 号、1993 年 9 月、61-105 頁

2011 (平成 23) 年

「書評 佐々木有司編著『法の担い手たち』」『法制史研究』第 60 号、2011 年 3 月、174-177 頁。

2012 (平成 24) 年

「書評 木村俊道著『文明の作法——初期近代イングランドにおける政治と社交』」『法制史研究』第 61 号、2012 年 3 月、324-328 頁。

(九) 事典執筆項目

2000 (平成 12) 年

「生ける法」「概念法学」「ゲルマン法」「自由法運動」「註釈学派」「ドイツ観念論哲学」「パンデクテン法学」「法史学」「法曹社会主義」「法曹法」「法典論争」「法の継受」「歴史法学」(伊藤正己/園部逸夫編『現代法律百科大辞典』1-7、ぎょうせい、2000 年 3 月 25 日)。

2004 (平成 16) 年

「ギムナジウム」「啓蒙思想」(尾形勇他編『歴史学事典 11——宗教と学問』、弘文堂、2004 年 2 月 15 日)。

(一〇) その他

1969 (昭和 44) 年

「ゼミ報告・上山ゼミ(西洋法制史)——創意を生かすゼミ」『有信会誌』第 16 号、1969 年 9 月、178-179 頁。

1980 (昭和 55) 年

「ドイツ啓蒙期における団体史素描——知識社会史によせて」(京都大学近代法史研究会編『近代市民法と知識社会の構造(昭和 54 年度文部省科学研究費補助金(総合研究(A)研究成果報告書)・研究代表者:上山安敏)』、1980 年)、45-60 頁。

1997 (平成 9) 年

「レトリックと社交術について」(『法とレトリック——その歴史・理論・応用(平成 5 年度~平成 8 年度科学研究費補助金(基盤研究(A)(2))研究成果報告書・研究代表者:植松秀雄)』、1997 年)、11-12 頁。

1998 (平成 10) 年

「教養とは何か」『山陽新聞』1998年11月22日付朝刊、第23面。

2012（平成24）年

「今は昔」『京都大学総合人間学部広報』第49号、2012年3月、8-9頁。

2018（平成30年）

「竹下君の思い出」竹下賢追悼集編集委員会編『泰然自若＝悠悠閑閑 「宙の如き宇の如き」人なり。竹下賢追悼集』、2018年5月12日、110-111頁。

（一一）学会報告

1976（昭和51）年

第168回法制史学会近畿部会（1976年5月16日）「歴史法学の価値理念と合法的思考の成立—F・ラサールの歴史法学像」京大楽友会館。

1977（昭和52）年

第25回法制史学会研究大会（1977年10月22日～23日）「エールリッヒ法社会学成立の歴史状況」大阪大学。

第179回近畿部会（1977年11月20日）「書評 Jan Schröder: Savignys spezialistendogma und die “soziologische” Jurisprudenz, in Rechtstheorie Bd. 7, H.1, 1976.」日独文化研究所。

1979（昭和54）年

第194回近畿部会（1979年11月18日）「近代市民社会における団体について」京都学生センター。

1981（昭和56）年

第209回近畿部会（1981年11月15日）「歴史法学の『学派』形成について」京大会館。

1982（昭和57）年

第30回法制史学会研究大会（1982年10月9日～10日）「法史学における法学史の可能性」関西大学。

1992（平成3）年

アスコナの会（1992年5月16日）「紹介 ジェイムズ・Q・ホイットマン著『ドイツ・ロマン主義時代のローマ法の遺産』（James Q. Whitman, *The Legacy of Roman Law in the German Romantic Era: Historical Vision and Legal Change*, Princeton University Press, Princeton, New York, 1990.）」楽友会館。（会の名称は過渡期のもの。）

1994（平成6）年

アスコナ会（1994年3月26日）「ウェーバーと『教養』」大阪ガーデンパレス。

1995（平成7）年

アスコナ会（1995年7月1日）「M・A・マレーの魔女論／その他」大阪ガーデンパレス。

1998（平成10）年

アスコナ会（1998年3月7日）「社交もしくは作法の歴史について」芝蘭会館。

2001（平成13）年

アスコナ会（2001年12月15日）「19世紀の教義と作法」芝蘭会館。

2003（平成15）年

アスコナ会（2003年9月27日）「福沢諭吉と国家理性——丸山眞男の所説を手がかりに」芝蘭会館。

2005（平成17）年

第382回近畿部会（2005年6月19日）「福沢諭吉と『文明』」同志社大学光塩館。

2008（平成20）年

アスコナ会（2008年5月31日）「カントとウェーバー——政治と道德」芝蘭会館。

2012（平成24）年

アスコナ会（2012年6月30日）「公德について」芝蘭会館。

2015（平成27）年

アスコナ会（2015年5月30日）「丸山眞男と『法学部』——教養思想との関わりから」奈良市北部会館市民文化ホール。

（一二）外部資金獲得実績

1977（昭和52）年度～1979（昭和54）年度

科学研究費補助金（総合研究（A）、課題番号：X00050）「近代市民法と知識社会の構造——ドイツ近代法史の社会史的研究」、研究代表：上山安敏、京都大学、4,800千円。

1980（昭和55）年度

科学研究費補助金（奨励研究（A）、課題番号：X00210）「ドイツ近代法史における団体と団体説の意義」、研究代表：西村稔、岡山大学、980千円。

1993（平成5）年度～1996（平成8）年度

科学研究費補助金（基盤研究（A）、課題番号：05401017）「法とレトリック——その歴史・理論・応用」、研究代表：植松秀雄、岡山大学、8,600千円（「法とレトリック研究会」につき、『中国新聞』1997年（平成9）年5月14日付朝刊も参照）。

★『文士と官僚』出版に際して1997（平成9）年度文部省科学研究費研究成果公開促進費の交付を受けている。

（一三）審議会など

2000（平成12）年10月～2002（平成14）年9月

倉敷市個人情報保護不服審査会委員

2002（平成14）年10月～2004（平成16）年3月

倉敷市情報公開・個人情報保護審査会委員

（以上）